地域の会報にあらわれる方言談話

――『三訪会会報』広島県尾道市三成地区を中心に――

藤本　真理子

一　はじめに

本稿では、「三成地区の歴史と自然を訪ねる会」の会報誌に掲載された「三成の昔の話を聞く」の資料紹介と、そこで見られた記述について考察を行う。この考察により、本資料のような地域の会報の持つ、方言研究における談話資料としての可能性を考えることができ、地域住民によって記録された資料に残される方言談話から当該地域の方言文法がどのように資料に残されていくかを見ていくことができる。

前稿（二〇二一）「地域のことばはどのようにして残るか――『三訪会会報』を資料のひとつに――」では、「三成地区の歴史と自然を訪ねる会」の会報誌に掲載された「〈方言シリーズ〉みなり弁ばあ」の資料紹介と、そこに見られた記述を取り上げ、方言が地域のアイデンティティを支える資源の一つであるという点に着目して、方言意識の考察を行った。前稿の「〈方言シリーズ〉みなり弁ばあ」の記述では、多くは語彙への注目が見られた。本稿で扱う「三成の昔の話を聞く」は、談話資料の記録のひとつとして扱うことができると考えられる。この資料を通して、語彙への注目では含まれなかった三成地区の方言文法を見いだすことができないか、いくつかの項目について観察し、指摘していく。

本稿は、各地域で作成されている多数の方言書のひとつとして、談話資料としての評価、また気づかれにくい方言が含まれる可能性について検討することを目的とする。

二　『三訪会会報』「三成の昔の話を聞く」紹介

本節では、『三訪会会報』「三成の昔の話を聞く」について紹介する。この資料は、「三成地区の歴史と自然を訪ねる会」の会報誌である『三訪会会報』（二〇〇二年創刊）で二〇一三年（六四号）～二〇一五年（七二号）までの全九回が確認できる。語り手は八〇代の女性が二人（そのうち一人は第二回のみ）で別々に収録されており、聞き手は当時の三訪会事務局長の板原壽雄氏である。

まずは、この「三成の昔の話を聞く」の記事の冒頭を示す。

（1）新しい企画として、三成在住、または三成出身の古老の方に古の三成の様子や戦前戦後を語っていただくことにしました。

初回は、三成下にお住いの石原恵子さん（82）のお宅をお訊ねしました。昔の思い出として、小学校時代と、昔の風習行事などについてお話頂きました。

聞き手　三訪会事務局長　板原壽雄（平成25年8月2日収録）

（六四号、一〇頁、二〇一三年九月二〇日）

（1）から、調査対象は三成出身の人物であり、調査場所は自宅、聞き手も地域住民であったことが確認できる。一度に収録された談話が紙面の都合上、計八回に分けて掲載されたものであり、総文字数は九〇〇〇字を超える。残念ながら、筆者自身は直接、音源を確認できていない。

また、最終回には調査を終えたのちの感想として、聞き手と話者の談話が次のように記されており、和やかに調査が進められたことがわかる。［　］内は聞き手による発話である。

（2）［何でもないことが、いろいろな人の話を聞いておりますと、まとまってきますからネェ。それで、いろんな話を聞かせてもらっているんです］

そうでしょう。祭りでも、賑やかなかったですわナァ。そこ、そこの四辻路じゃなんじゃいうところに、みな、灯籠が立ってナァ。灯をつけてナァ。そりゃア、ほんと祭りらしかったで

すよ。昔が懐かしく思い出させてもらいました。有難うございました。　おわり

（七二号、一〇頁、二〇一五年一月二四日）

三　会報にみられる三成地区の方言

三節では、「三成の昔の話を聞く」の方言談話にみられる三成地区の方言について観察していく。まず注目するのは、方言語彙がどのようにあらわれるかである。次に、方言談話内でどういった方言的要素が用いられているか。これは、編集の点から考えると、「方言談話「らしさ」」を保つものとしてどのような語彙が選択されているかと見ることもできる。さらに、これらに含まれるとは言えない気づかれない方言も一部見える点を指摘する。

三・一　談話内であらわれる方言語彙

「三成の昔の話を聞く」（以降、例では「昔の話」と呼び、第何回かを示す）の方言談話において、「〈方言シリーズ〉みなり弁ばあ」（「みなり弁ばあ」と呼ぶ）の全四五回に登場した語彙・語句の中で合致するのは、「うがす」「ちゃった」の二項目である。

（3）a．そして、女子はネ。門の左側にずっとまァ、畑みたいにうがしとるわけ、そこへ、白い「ケシ」を植えている。（昔の話、第3回）

b．「うがす」／気（ママ、「木」の誤り）の根っこを掘り起こす時などに使う「その松はおみゃあにやるけえ、うがして持って帰れ」／「かさぶたをうがしてしもうたけえバンドエイド貼ったあ」などと言う／（略）前号「いびせい」のような古老クラスでないと使われなくなった言葉と違って、今でも広く「うがす」と使われている便利な言葉だ。「掘り起こす」などと漢文のヤマト言葉読みのような廻りくどい言い方を三成人はしない。（みなり弁ばあ、三訪会会報四号、二頁）

（4）a．まァ、この上「こまるこ」いう殿さんがおっちゃったようなでしょう。（昔の話、最終回）

b．「ちやつた」／**がんす**と同じような丁寧表現或いは尊敬表現で過去形。／**がんす**は物事を特定するのに用い（でございます）という風な

意味で、古老クラスを除いて現在ではほぼ使われなくなった。／しかしこの「**ちゃった**」は先生が来**ちゃった**（先生がおいでになった）あの人は今までここにおっ**ちゃって**、さっき帰えっ**ちゃった**（あの人は今までここに居られて、先ほど帰られた）などと今でも広く使われている

（略）（みなり弁ばあ、三訪会会報一九号、三頁）

また、「〈方言シリーズ〉みなり弁ばあ」には記載のない項目で、次のような表現も含まれている。

（5）a．ほら、向うには今、家がよけい立っている尾高の近くの山、そこの山も呉の海軍さんと一緒に開墾したんよ。（昔の話、第1回）

b．それじゃけン、昔しやァ、餅米をようけつくりようたナァ。（昔の話、第6回）

灰谷（二〇一六）『これが広島弁じゃ！』に記載されるように、（5）は「たくさん」という量の多いことを表す意で用いられる。この談話内では「〈方言シリーズ〉みなり弁ばあ」に立項され、尾道市内で現在でも地域の言葉として強く認識されている「ぶち」は用いられない。

また、次の「ようず（揚子）＝凧揚げ」のように、話者自身がその語の意味を説明する形で現れるタイプもある。

（6）お正月の遊びですか。もうねエ。男ん子はどう云ウン。あの「ようず”“ようず」ようたですわナ。凧揚げをネエ。（昔の話、第4回）

（6）のような語彙は、標準語、または現在はなかなか通じにくいのではないかと話者が考えていることがわかる。昔の行事や風習、農作業用具名などが多くその対象となっていることが確認できる。また話者自身の意識にかかわらず、編集の段階で該当する語句をカギ括弧でくくったり、図や絵によって情報を補足したりする様子が見られた。

一方、聞き手、話者にとってあまり方言語彙として意識されていない語があることも確認される。

（7）今は飾るんがあるけど、むかしは、おひめさまの三段かナア。「えさん」があるわけよ。あれへ作ったのを、藁がはいったような、それを

差してナア、下げたりする。／［**えさんの下ったのに袋みたいなものが…**］／あのねエ、そうそう、絵があるんですよ、えさんへ。そこへ穴があいとるんじゃん。そしたらこっちえおひなさんをこしらえてある。綿を入れてからなア。それを差すようにしてあるんじゃん。そうなのを飾りようちゃったけどナア。（昔の話、第7回）

この箇所は、掛け雛の説明と見られるが、「えさん」とは「絵賛」のことであり、おそらく掛け軸のようなものを指すと考えられる。この語は、広域的にみられる方言語彙のひとつであるが、談話を見る限り、話者、聞き手とも気づいていないようである。

三・二　談話を構成する方言的要素

「三成の昔の話を聞く」資料では、広島方言とされるコピュラの「じゃ」原因理由の「けん」の使用はもちろん、(5)の「つくりょうた」に見られる「～ょうた（ようる）」というアスペクト形式、（4）に示した「ちゃった」のような敬語形式が数多く確認できる。敬語形式に関しては、さらに（8）のようなテ敬語も確認できる。

（8）それにお餅をもって、親戚へ配るわけ、そしたら向うに祭りの時は、また、持ってきてくれてんです。（昔の話、第6回）

その他、この地区に限った方言的要素とは言い切れないが、「～たです」という動詞の過去形に「です」がつく形式も複数確認できる。

（9）a．かくれんぼからネ、おにごっこなどして日が暮れるまで遊んどったですよ。（昔の話、第1回）

b．そういう、どこが結婚式いうたら、みんな見に行きようたですよネ。（昔の話、第5回）

三・三　談話内に見られる気づかれない方言

談話内では、方言形式ではないかと考えられるものが（10）（11）のようにいくつかあったので指摘しておく。

(10) a．そんなことをして遊ぶようなかったですナァ。（昔の話、第４回）

b．そして、女の人は、子供も大人も着物来て、そりゃァ、ほんま、祭りのようなかったナァ。あれはァ。（昔の話、第６回）

(10 a) は「遊ぶほかはなかった」という意で考えられ、(10 b) は「祭りであることはこの上もなかった」という意にとることができる。

(11) そうでしょう。祭りでも、賑やかなかったですわナァ。そこ、そこの四辻路じゃなんじゃいうところに、みな、灯籠が立ってナァ。灯をつけてナァ。そりゃア、ほんと祭りらしかったですよ。（昔の話、最終回）

(11) の「賑やかなかった」は、「賑やかだった」という肯定の意を表している。また、この箇所の他、二回確認できるため、この表現は編集の誤植ではなさそうである。この「賑やかなかった」が何かということについては、一つは、「〜かった」が形容詞だけでなく、形容動詞にも適用されている可能性がある。もう一つは (10) に示した「ようなかった」の「なかった」と同じように「賑やかであることこの上ない」ということを表すものとも考えられる。

四　まとめ

本稿では、「三成地区の歴史と自然を訪ねる会」の会報誌に掲載された「三成の昔の話を聞く」の資料紹介を行った。さらに、資料内の方言語彙のあらわれ方、本資料の方言談話を構成する要素の指摘、また資料内で見られた方言に見える形式について一部考察した。

今後、三・三節で見たような形式の追跡調査、さらに複数ある敬語形式の使い分け、また「そんな」「そういうように」、「あんなふうな」にあたる「そうな」「そうに」や「ああな」の語形についても調査の必要がある。

調査資料

三成地区の歴史と自然を訪ねる会『三訪会会報』創刊号〜三四号

三成地区の歴史と自然を訪ねる会『三訪会会報』五九号～八〇号

参考文献

灰谷謙二（二〇一六）『これが広島弁じゃ！』、洋泉社

藤本真理子（二〇二一）「地域のことばはどのようにして残るか ―『三訪会会報』を資料のひとつに―」『談話会会報』一一、尾道市立大学芸術文化学部日本文学科、一九―二六頁

付記　資料紹介

「三成の昔の話を聞く」（第1回、第3回～第9回（語り手　石原恵子さん、聞き手　板原壽雄さん、平成25年8月2日収録））の資料として再録する（なお、網掛け、四角囲み、傍線は本稿筆者による）。

■三成の昔の話を聞く（第1回）

［子供の頃の思い出や遊び、おじいさん・おばあさんとどのような生活をされましたか］

私ら小さい頃は、家の中で遊ぶいうことはなかったんですよ。

外でね。近所の友達とね。学校から帰ったときとか、学校に行ってないときも、ずっとゴム飛びとか、どういうかネェ。ラムネッコ、ころがして遊ぶ。穴を掘ってそこへラムネの玉を投げて遊ぶ。

そうなん知っとってんないですゥ？かくれんぼからネ、おにごっこなどして日が暮れるまで遊んどったですよ。そして、ちいーと大きゅうなって小学校に行くようになるでしょう。

今度は、戦争が始まった。そうすると、ほとんど勉強がない。本がない。鉛筆がない、教室もないというような状態だった。というのもナ、大阪から疎開児童が来て、その教室を取られるわけヨ。

そして私らはナア、あったでしょう宿直室。そこで、雨が降った日には、座って先生が本を読んでくださる。そして天気には「鍬」とか、「エンボ」とか「肥タゴ」のようなものを持って開きに行く。乃木さんの裏の野山から清水上の野山のところへ。

ほら、向うには今、家が よけい 立っている尾高の近くの山、そこの山も呉の海軍さんと一緒に開墾したんよ。海軍さんが「僕らは海の仕事をするのに、こんなところでしょうて、戦争は勝つはずがない」といって笑わしょう

ちゃった。そりゃア、もっともですよナ。

そして帰ったら運動場へ並んで、ふかしたお芋を半分ずつもらって昼に食べる。時には雑炊、粉末の雑炊、それに「イナゴ」でだしを取る。私しゃアよう食べんかったけんなア。じゃけン「鍬」の担ぎ方まで教わった。そんじゃけン、まぁー勉強はなかったです。

クラスで靴とボールが一つずつ配給になる。靴は当った人の足合わんことがあるでしょう。その時は合う人にあげる。ボールはみんなで一緒に遊ぶんで、自分が当たっても自分のもんじゃない。持って帰ることはせなんだネ。

そして、開墾をせんときは、あの学校の運動場に柿の木があったでしょう。近くに登り棒があって、あれねエ、10本あまりかなァ。それをヨーイドンで登るわけよ。上まで、そしてサーとおりる。

それがすんだら、女子は薙刀、男子は剣道ネ。それは何のためにそうするか言うたら、戦争に負けたら、アメリカ兵がなア、陸上に上って来る。そうしたら、自分の身を守るために練習させてん訳よ。まア、あの時分じゃけん、子供じゃけん、そんなこと思わんけどナア。

そういうことしか、学校の思い出はないです。第一回了

（二〇一三年九月二〇日、三訪会会報六四号、一〇頁）

■三成の昔の話を聞く（第3回）

［三成小学校の遠足「八社まわり」はどうでしたか］

遠足は八社まわりしかない。修学旅行は全くないんン。八社まわりはネ。1年生は三成の八幡さんネ、2年生は三成と木梨。3年生になったら、久山田、木頃、深、こんど高学年になったら、栗原、そして向島、西。そして、そうやってなァ「武運長久祈るいうことでナア、戦争が勝ちますように」いうて。じゃから、あれ、参りようたんじゃけんどナア。そのかわり、その時弁当持っていくでしょう。お弁当ナア、日の丸弁当じゃないと、絶対に先生、食べさせんないン。見て廻ってん。そんで、ちょっと好いのを持っていっとたら、そしたら取り上げて食べさせんないん。そしたら可哀そうじゃろう。先生に隠れて、「おにぎり食べ」いうて渡す。そうな厳しい時じゃったのゥ。まぁ、修学旅行もないしナ。遠足はそれじゃァあるしナ。ほんま、どういうんかのゥ、寂しい学校じゃったような気がする。

［日の丸弁当は、麦飯に梅干しが一つ、まん中に入れて・・］

そうじゃけんネ。うちらみたいな百姓しょうるところは、お米が供出しょうてもあるでしょう。そうしたら麦いうもんは炊いたら上に浮かぶわね。上ばっかし麦が、底はお米、そして上に麦を置いて米を隠して、おむすびの中へ梅を入

れる。それも、先生がぐるっと廻って、それで「ヨシ」と云われたら弁当食べるん。まあァなんか、そうなかったんじゃけんどね。

［八社まわりはかなり距離がありますよネ。］

ありますよ、あの時分じゃけんネ。あの時分じゃけン、もうみんな歩いたりする事しかないでしょう。そいじゃけんナ、えらいナー、とか、足がだるいということはなかったですねェ。そうそう、歌を唄いうたい行くんですヨ。歌、いうてもですネ。あの西郷隆盛さんの歌じゃったと思うです。あの歌を唄いうたいネ。

［覚えとってですか］

『一かけ　二かけ　三かけて　四かけて　五かけて　八をかけ　橋の欄干手を腰に　はるか向こうを眺むれば十七、八の姉さんが花と線香を手に持って姉さんどこかと尋ねたら　私は九州鹿児島の　西郷隆盛娘です　明治十年戦役に　切腹なされた父親の　お墓参りをいたします　お墓の前で手を合わせ南無阿弥陀仏を唱えれば　西郷さんの魂はふわりふわりと　じゃんけんぽ・・』いうの。多分、そうじゃったと思うヨ。貴方ら知っとってんなかろうなァ。それじゃけン、私しら【「私ら」か。ママ】か、一級下まではあァいうことしょうたわねェ。まァほんま、貧乏くじやったなァ。　あの時は…

［戦時中に松ヤニを取りに行きようたと聞いたことあるんですが］

へェ、へェ、男の子がネ、松ヤニを取りに行きようたです。そして、女子はネ。門の左側にずっとまァ、畑みたいに うがしとる わけ、そこへ、白い「ケシ」を植えている。そして、こうに刃のついたようなもので、三カ所に傷をつける。そうしたら、白いのが浮いてくる。ヘラでこれを取る。それが、また、匂いがナア、あれで頭が痛うなる。あれほど辛いなァ、なかったヨ。マスク、手袋はない。冬もソックスなんか履かせてもらえなんだ。医者で証明を書いてもろうたら、マスク、マフラーしてもいい、あの時分はそうじゃったネエ。大変じゃったなァ。あの事を今孫らに云うたら涙を流して聞きょうるけどなァ。ほんとたいへんじゃったですよ。今は極楽のような気がしますよ。

次号へつづく

（二〇一四年一月二五日、三訪会会報六六号、一〇頁）

■三成の昔の話を聞く（第４回）

［正月はどうでしたか］

正月が来たらネエ、学校へ行くわけ。そしたら、一番上に校舎がある、部屋が三つあったネエ。あの時分はネ。そしたら一つの部屋をね、戸をはずして、そこを講堂にしょうて、一番こっちが天皇皇后両陛下の御真影が祀ってある。

そして校長先生が礼服を着て、白い手袋をして、簾をあげて、「朕おもうに……」云うて拝んでですヨ。そして赤、白の餅をもらって帰るんですヨ。そしておうちに帰ったら、家族がみな、神さんと仏さんを拝むでしょ。そして、今度、みんなで食べるときには、大人はお神酒で、子供はジュースでなア。そしてなんじゃ、「みんな、今年も元気で一年過ごせますように、仲よくやろうや」いうて、おじいさんがいう。そしたら、乾杯をして、そして、雑煮を食べた。

［お年玉はあった？］

私たちのときには、あのぅ、お年玉が、ネ。お年玉というのは無かった。そのとき初めて、ポックリという下駄と、タビ、ビロードのタビ、それと羽子板を買ってもろうて、それが今でいえば、お年玉のかわりじゃろうと思う。それをもらって、ほいで遊ぶことをしよぅたナア。

［お正月の遊びは？］

お正月の遊びですか。もうねエ。男ん子はどう云ウン。あの「ようず」”“ようず」よぅたですわナ。凧揚げをネエ。それを揚げたり、今云うラムネっこ遊びをしたり、女の子は羽子板とかナア。あァなことしょうたじゃけェ、遊び云うたら。だいたいきまっとるわナ。あの時分じゃけン、みんなで広い庭のある友達のところに行って遊ぶようなことが。じゃけんネエ。そんなことをして遊ぶようなかったですナア。

［それから、二宮金次郎の像が昭和十年ごろぐらいに、全国の小学校に据えていたということですが、三成の小学校にもあったとか、なかったとかいうことご存知ですか］

私は多分、門を上がって右側が角になったですナア。そこへあったような気がするんです。そして戦争が始まったらなくなったと思います。石で作ってあるンやけんどねぇ。そうなことしたらいけなんだんでしょうかナア。と思うたんですけどナア。しらん間になくなっとったですよ。

多分戦争のためじゃと思う。そりゃァ、鉄や何とかみな出しょうたけどナア。それは石でしょ。じゃけんど、そうなものを、祀るというか、どうか、そんなことしたらいけんのかどうか、知らんけどネエ。どういうていいんかナァ。こんな話を今の人にしても、ピンとこんかもしれんけどナア。

（二〇一四年三月一五日、三訪会会報六七号、一一頁）

■三成の昔の話を聞く（第5回）

《その頃の結婚式の様子についてはどうでしたか》

結婚式いうたら、昔は家でしょうたでしょうネェ。そして、提灯に灯を付けてネエ。道中ずっと長い道の人もおってでさアナ。遠くから来る人。それ、ずっと灯して家まで行くんですヨ。そしたら、近所の人が、みんな見に行くで

しょう。見に行って、私、あの時、お菓子もろうたように思うんじゃけんどナァ。子供の時にナ。お菓子もらって帰りようた思うんじゃけんど。

《嫁（よめ）菓子いうんじゃァ……》

そうそう、まァ、嫁さんの土産いうことでしょうよナ。

そして、そうなかって、まァ、終わったら帰るんじゃけんナア。そういう、どこが結婚式いうたら、みんな見に行きょうたですよネ。

今は、ありヤまア、何時しちゃったん、ようなでしょう。もう、家じゃアなしに、外でしてじゃけんナア。今は菓子をもらいに行きょうるんかナア。配ることないですよ。嫁をもらうところにお菓子をだしょうたよね。

じゃけん、どういうか、静かな結婚式じやったあネ。お客もそうネェ。濃い人しか呼ばんしナア。今はもう友達から何から大勢呼んで、賑やかにしてでしょう。なアー。お金もたくさんいることじゃろうと思うけど、まぁ、ほんと質素な、まア、昔じゃけんいうことと、戦争が終わったけ、いうことで、そのように質素にするんかどうか、わからんけど、と思いますよ。私はナア。

《農作業で稲作、裏で麦、そして後植えなどについての苦労話はどうでしょう》

麦とかねエ。お米はまだいゝ。昔は牛を使って、耕しょうたけネエ。それを、鍬で、こもう、こもうして、振りマンガで、また、こもうして、振りマンガで、また、こもうして、そして水をあててというような田植えをしょうたでしょう。そして、しまいにはネエ。麦の時にはネ。稲と稲の間をネエ。ちょっと掘って、そこへ麦をまいたり、しょうたアナ。

まあ、一番つらかったのが、藺刈（いかり）、イ草じやったと思う。

私子供じゃったけんか知らんが。男がおらんかったけエ。特にそうじゃったんだろうけどナア。

稲刈りなんかはネ。今でいう、北高、昔は中学校ようたナア。中学校の生徒が先生の家へ刈に来てくりょうちやった。昔はナアー、そりやア、そりやア助かりましたよナア。

盆には、私ら戦死しとってんところの墓を掃除したり、勲五等とかいう大きな墓があったでしょう。あの人の墓を掃除に行ったり。いっぺん、あのウ、歌を作っとる偉い人だいうて、ようちゃったでしょう。私、後から思うた、あの人じゃないんか思うたけど。

まア、とにかく、昔の麦にしても、稲にしても全部、自分の手がかかるでしょう。ナア、機械でなしにナア。そして、「こぐ」いうても、マンガでこうするんじゃけん、振りマンガいうて、たたいてから、こうつぶして、麦をだしてと

いうようなことをしていたになァ。今も中国の奥地の方でしょうるナァ。時々、〝ウワー〟と思うて見るんじゃけんどナァ　つづく

（二〇一四年四月一九日、三訪会会報六八号、一二頁）

■三成の昔の話を聞く（第６回）

［お正月やお祭りなどはどんなかったですか］

盆じゃァ、正月じゃァいうたらネェ。ほんと、楽しみがあったよネェ。それじゃけんネェ。おかずもなんでしょう。尾道までおじいさんが、いつも買い物カゴをネェ。オオクで担いで買いに行きょうちゃったです。ほいで、鯛ソーメンするいぅので、鯛とかいろんなものを買ってきてからネェ。お盆はねェ。祭りの時には、親戚がみんな来るでしょう。だから、昔だから、兄弟が多いでさァなァ。そうしたら、中道ゆうんがあった昔は。今は中道はないけど。三成橋からこの下まであった。それをズーと学校の生徒が遠足に行きょうるんかというほど、並んでうちには来よったんじゃそうな。そりゃァ、賑やかなかったですよ。

［一緒にくるということは電車が走っていたから］

そうゆうことでサァ。今は来てもネェ。食べたら晩には帰るでしょう。昔の人は泊って帰ってでしょう、ナァ。蒲団から何からみな用意せんといけんということでなァ。賑やかな、あれじゃったんじゃけど。

［秋祭りは三成の八幡さんは神輿がでますよね］

あれはまぁ。今は担いで行かんでしょう。肩が弱いけェ。昔は、すごう賑やかなかったです。八幡さんへ行ったら、三体出るでしょう。そして、女の人は、子供も大人も着物来て【「着て」か。ママ】、そりゃァ、ほんま、祭りのようなかったナァ。あれはァ。

［そういう祭りに親戚の人が前の日に来られて、あくる日は八幡さんお参りですか］

そうそう前の日に来られて、泊まったりして。二宮さんへ、二宮まつりナァ。あそこでもネ、前には神楽がありょうたんですよ。二宮さんでネェ。毎年じゃあなかったですよ。店もちょっと出ようたですけどナァ。わりに賑やかだった思うんじゃけんどナァ。

［その時に親戚を呼んで……］

そう、祭りがこんどあるときには〝切り溜〟があるでしょう。早う云うたら、重箱を大きゅうしたような、深さが10センチぐらいナァ。それにお餅をもって、親戚へ配るわけ、そしたら向うに祭りの時は、また、持ってきてくれてんです。それが何時からかナァ。尾道と一緒になったでしょう。じゃけン。そんなことはせんようになった。同じ日に祭りになるから。あの時分は、みな持っていきょうちやったけネェ。

［一軒の家にお餅を何個ぐらい持っていくんですか］

そりやァ、相手の人数によってからじゃけんなァ。そりやァ〝切り溜〟いっぱいじゃけんなァ。30以上持って行きょうちゃった思いますョ。餅は白だけよ。それでネェ。姑さんがおってんところは、ちょっとうるさいでしょう。昔じゃけン。少し大きゅうして持っていくわけよ。普通の餅より、ちょっと大きゅうしてから。そしたら、こっちから嫁に行った者が、喜ぶでしょう。姑さんが、どうも云うてんないけんなァ。そして、今度ァ、たとえば、尾道の吉和が祭りじゃ思うたら、餅がくるじゃろう思うて、子供じゃけ楽しみにまちよった。親戚の多いところは大変じゃんネェ。それじゃけン、昔しやァ、餅米をようけつくりょうたナァ。

つづく

（二〇一四年七月一九日、三訪会会報六九号、一一頁）

■三成の昔の話を聞く（第7回）

［続いて昔の風習行事である雛祭り、端午の節句などについてお聞かせください］

昔はなんもかんも、旧（暦）でいきょうたけんナァ。なんもかんもナァ。節句には、始めて生まれたときには、田面船（たのもぶね）を持っていくでしょ。なァ、そして、今度ひな祭りのときにはネエ、今は飾るんがあるけど、むかしは、おひめさまの三段かナァ。「えさん」があるわけよ。あれへ作ったのを、藁がはいったような、それを差してナァ、下げたりする。

［えさんの下ったのに袋みたいなものが…］

あのねエ、そうそう、絵があるんですよ、えさんへ。そこへ穴があいとるんじゃん。そしたらこっちえおひなさんをこしらえてある。綿を入れてからなァ。それを差すようにしてあるんじゃん。そうなのを飾りょうちゃったけどナァ。「たのみ」には、あの、もち米で作ったおごうさん、お姫さんの。男は、あの馬にのっとる侍。そして、あの「ひょうため」がおるでしょう。柱の下の方へ砂がある、「蟻地獄」よね。穴が開いたところ。「ひょうため　こんこん　きつこんこん」云うたらでてくるけえ。それを今その中に入れたら、歩くんヨ。競争するわけ、みんなで。そうしたりしょうたナァ。

［親指ぐらいの人形を作りますよね］

えエ。それとお姫さんはこうに大きいけどネエ。絵をかいてナァ。着物を着たようにしてあるけど…。

「たのみ」宗重院に最後のお盆の行事があらアネエ。そのあくる日だったかなァ。「やあとうの日」というのを知っとって。やいとをすえるんじゃァ。それが子供が元気に育つように云うてネエ。我が家でネエ。そういう行事もあったなァ。

［やあとう日ゆうて、八朔の後の日……］

そういう日云うんがあったけどなア。今でも、云うてかもしれんが、あの、「正月三日、盆二日、祭り一日寂しいかな」ということを云うじゃろうナア。知りませんか。初めて?ああ云うてね。私ら子供の時なんか、よういようりましたよ。そしてお盆にゃア、今日から晩にゃアお盆じゃいうときまで、畳表を打ちょうたでしょうナア。そしたらそれが二枚終った、その後、花莫蓙を打つ。花莫蓙いうなア、仏さんの前へ敷くんよナア。あぁなのを、おばあさんら、しょっちゅうやったがナア。アア。早うやめてにゃえのに、盆がくるのに思ようたけどナア。あゝいうことをしょうちやったわナア。男の人はほとんど田畑の用事をする。女は畳表をするような、あれじゃったあナア。なかなか辛抱するときじゃったけ、夜なべが多かったけナア。今、夜なべいうたら、テレビ見るようなことでしょう。あッハハハ……。ほんと。

［田面の人形いうのは、尾道の方で…］

あのね、杓屋小路で買って帰りょうた。あそこでね。田面船もあそこで売りようるけエ、あそこで作ってナ。

［昔の商売で、ザル、エンボを担いで売りにきょうたということは?］

箱をこしらえたのを背負うてなア。あの頭に付ける油とか、あのクリームとか、かんざしとか、あゝなのを、あれは、山方の人だったと思う男の人が、背負って売りに来ようちゃったナ。そして戦後には魚をカンカンに入れて売りに来ようちゃった。それでも毎日じゃあなかったけどなあ。

つづく

（二〇一四年九月二〇日、三訪会会報七〇号、一〇頁）

■三成の昔の話を聞く（第８回）

［昔の思い出は ….］

えー、えー、つきんでさぁナァ。あのォ、私しやァ、おばあさんがナァ、よう云うけェ、うるしやぁぐらいに。聞くけどナァ。今、私は子供らが来て、まあ、話しゅうすりやあ、「ほりや、おばあさんのこれから話が始まるどー」いうて、みな孫が云うんです。じゃけんど、やっぱり云わにゃあ頭へ入らん思うてナァ。「おう、よう聞いときよ」と云うんじゃけんどナァ。げん、そりゃア、昔の人は本当いうてんかナァ。「そうじゃそうない」いうて想像しようてんかどうか、知らんけど。「淵んかま」があるでしょう。

「淵んかま」云うて……？］

あのねぇ、「どんど」があったあナァ。「どんど」いうて、こうに、そこをちょっと降りたら、あそこのガス会社の前へね。「淵んがま」云うんじゃけんどナァ。そこじゃァ。泳いじゃァいけん、云わりようたん。むかしじゃけんナァ。

「エンコウ」が居るということで、そしてずっと。そこへタテになァ岩が割れている。そうしたら、その岩をネェ、尾道の浄土寺へつながっていると聞いたん。ウン。ほいじゃけん、そうように入った人がおってんか、どうかしらんけどナァ。ほんま。

［エンコウいうたら］

エンコウ、エンコウ、エンコウが引っ張るいぅて、いうから、カッパのことじゃろうネェ。昔、エンコウ、エンコウようたんでしょうよ。それとネェ。12月に冬至が、冬至じゃったと思う。その時にお嫁に行くでしょう。新婿さんを呼んで「大根なます」を食べさす。どういう云われじゃったんか知らんけどナァ。じゃけん、婿さんをよぶ。まァ、嫁さんも来るけどよ。婿さんをよぶんじゃいうてナァ。今年の終わりやいうぶんでナァ。まあ頼むということでナァ。その時に、ナマスをね、食べさすんじゃ云うて聞いたんじゃけんどナァ。ハァ。思うて私しゃ聞いとるんじゃけんど。どうしてとは聞かなんだんじゃけんど。よそでもしょうじゃったんかいナァ。こゝらの近所の人に聞いてもわかるまあナァ。何か言われがあるんでしょうよ。　つづく

（二〇一四年一一月二〇日、三訪会会報七一号、九頁）

■三成の昔の話を聞く（最終回）

［岡ん堂の地名と由来を話していただけますか］

いやァ、その地名というのは、ようわからんのじゃんけどナァ。まァ、この上「こまるこ」いう殿さんがおっちゃったようなでしょう。お城があって、木梨で戦争して負けた云うて。その時におばあさんが云うてのには、畑にみな名前が付いとるわけナァ。「おひいさん」の屋敷があったけェ、「おび屋敷」とか云うように、そして向うへは、中の門があったけ、中田門、そしてこっち大門があったんが、一番大きい門、外の門じゃった。ということを聞くでしょう。そして、こないだ、大門さんが来られて、「おたくァ、昔から大門さんいう苗字じゃったん」云うて聞いたんですよ。その大きな門があったけ、大門としとってかと思うて。そしたら、「いや、昔は、あの名前何やら云うたんやがのォ。へいで大門に変わったんでぇ」云うちゃったけなァ。「そうなァ、そうなァ」云うたんじゃがナァ。じゃけん、うちは、あの、なんか元は油を、あの明り用のネェ、あの油を造りようたとか云うて聞いたけどナァ。それで、堂が上がってきたから「岡ん堂」云うんじゃないよ、云うて、わたしゃ云うんじゃけどナァ。昔から岡ん堂で、あのお堂は、遅うに上って来ちゃったんじゃ云うんじゃけどナァ。ここは、みな土地の名「こまる」になっとるけんどナァ。それで、屋号が

「岡ん前」になっとるけぇ。堂があったんじゃろぅかなァ。

［こゝ全体が山城のあとですよね］

そうそう、じゃけん、ここは、ずぅっと「こまる」になっとるんじゃァないですかナァ。

［そして小丸城いうて……］

そうそう。殿さんが小丸公じゃいぅて名前をナァ。姓は石原じゃそうな。じゃけん、石原いうんも、あちこちあるけど、一番石原じゃァ、古いんじゃ云うことは云うとったァなァ。まァ、古い家はみんな高いところにありまさァなァ。どうしても食べ物を作るために、やっぱ、こういう高いところへ上ったんがえゝんかナァ。

［今日はどうも有難うございました］

つじつまが合わない話をしてから、すみません。いろいろ聞いとるんけんどナァ。ようもないことばっかりじゃけんナァ。どうじゃこうじゃ云っても大事なことはあんまりないでしょう。

［何でもないことが、いろいろな人の話を聞いておりますと、まとまってきますからネェ。それで、いろんな話を聞かせてもらっているんです］

そうでしょう。祭りでも、賑やかなかったですわナァ。そこ、そこの四辻路じゃなんじゃいうところに、みな、灯籠が立ってナァ。灯をつけてナァ。そりゃァ、ほんと祭りらしかったですよ。昔が懐かしく思い出させてもらいました。有難うございました。　おわり

（二〇一五年一月二四日、三訪会会報七二号、一〇頁）

本研究は、JSPS 科研費 JP20K00633 の助成を受けたものです。

―ふじもと・まりこ　日本文学科准教授―